Z304a 「長野県は宇宙県」と近代天文学史

大西浩次 (国立長野高専), 衣笠健三 (国立天文台野辺山), 青木 勉 (東大木曽観測所), 陶山 徹 (長野市博物館),「長野県は宇宙県」連絡協議会, 「長野県は宇宙県」天文文化研究会

いま、「長野県は宇宙県」を合言葉として、長野県がもつ星空の資産・魅力を広く伝えていく活動が行われている。この活動の 1 つとして、天文文化研究会 (陶山徹, 本発表) を発足させ、長野県内外の天文学史に焦点を当てた調査研究が始まっている。このテーマの一つとして、近現代を中心とした天文学史をフィールドワークやインタビューなどを通して調査研究する計画について紹介する。ここでのキーポイントは、諏訪天文同好会である。諏訪天文同好会が 1922 年に設立されたきっかけは、山本一清による天文同好会（1920）の支部として、1921 年に諏訪支部 (三沢勝衛) が出来たことにある。このとき、会費を払うことができない子供たちを集めて、市民の天文同好会として誕生したのである。この諏訪天文同好会は、関西派（花山天文台, 山本一清）と関東派（東京天文台, 神田茂）との交流を深め、日本における近代天文学の黎明期から発展期に至るまで強い相互作用を及ぼしてきた。

活動の内容も初期の観測的研究から、60 年代後半の日本初の自然トラスト運動、天文普及活動に至るまで、常に近代日本の天文学史・天文教育史の現場にあった。いま、「長野県は宇宙県」として、諏訪天文同好会史を基軸に、多くの天文研究施設（東大木曽観測所、国立天文台野辺山など）ができるに至った経緯や、市民への普及活動・トラスト運動が後世に与えた影響などの調査を行っている。この調査では、「長野県は宇宙県」に関わる多くの研究者やアマチュア天文家などの力を結集させる。こうして、近代天文学史をフィールドワークや関係者へのインタビューなどをもとに振り返り、市民が天文「学」の進展にどの様に関わったか、市民が天文「普及」にどの様に関わってきたのかを、これから約 2 年間で明らかにしてゆきたい。